



五葉和歌集
下

特別
8099
14(2)



ハ4
8099
14
(2)

Handwritten Japanese text in vertical columns, including the characters 皇太子 (Emperor's Son) and 皇太后 (Empress Dowager).

玉葉和歌集卷第十一

戀歌三

寄海老をよみて後三位為子

うき浪の如くあはれを後のうきとてくわゆる物を

あはれをよみて後三位為子

波乃より志のひかりとわらぬをいふははらうら

あはれをよみて後三位為子

任然乃海より杉の漆のめをいふをいふをいふを

あはれをよみて後三位為子

かみつらみめもあはれはわらひ海とあはれを床と恨せ

あはれをよみて後三位為子



つまねいららわ袖を浪うう気孫のねとてこはあま

なまのゆふた

女清綴子女ま

こら風をひきこそあま舟舟舟と揺りこるねをふ

宰一毎茲

院清製

浦之れ入るまじつうは舟の我うとていそみき

無乃予申こ

待賢門院坂河

ふ方井たあまをまきりあまけかむとくひたあま

くめしとあま袖はらゆるふれやまをまきり

きりこころありこきりてわりそくあまけあま

信浦初信

わくあまをまきりこころあま井たはるるるこまきりすん

無乃あま後約たり

京橋前岡自家服後

ふら川の屋あまのけりあま孫とあまをまきり

無乃あま後

大伴郎女

あまをまきりあまはあまのままはあまをまきり

院中御云定頼

あまをまきりあまはあまのままはあまをまきり

清の御云

あまをまきりあまはあまのままはあまをまきり

無乃あま中

西の御云

あまをまきりあまはあまのままはあまをまきり

あまをまきりあまはあまのままはあまをまきり

弟大御言為美

時ありては公のつらりとたつねをこころぬり美
從三位親子

こころはなをそわすひの義はなれどもいふをねを
ありはなれ御あくる言ふをこころませせしを
從三位房子

そはかると
不慮なりはなれをそわすひの義はなれどもいふをねを
實秋門院丹後

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
大の頼重

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
大の頼重

群ら

院中御言為美

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
永福門院

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
從三位親子

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
新院法親王

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
中御言家持

美言中
けがれをそわすひの義はなれどもいふをねを
清慎云女

予の漢書に在りて海内の人を言ふは其の多きを

にきたり也

及ばざるを以て海内の人を言ふは其の多きを

如くはるるにけり 實方朔言

吾も漢に在りて其の多きを言ふは其の多きを

宣道前言其の多きを言ふは其の多きを

をれん 二重後宣言

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

如く 宣道前言其の多きを言ふは其の多きを

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

如く 宣道前言其の多きを言ふは其の多きを

入道前右政大臣

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

左大臣

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

前大臣言為家

和泉式部

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

和泉式部

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

及ばざるを以て其の多きを言ふは其の多きを

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

世にわびる事

重之如

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

年乳母

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

從三位親子

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

申す事

前大御言為家

わびる事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

前大御言為家

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

忠義云

申す事とらばり事かかると感るるり事か
世にわびるる所とすれ事といふ事
わびる事とせし海とわびる事とせし海と
世にわびる事とせし海とわびる事とせし海と

前大御言隆房

あり袖を海におきてくらあまをふたらまわつた

無言中に

後西大寺友三郎

ふとらあまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

西行法師

うたてしをくいとてまへ中にいつて人のあまを思つ

悔念ふ

一位教良女

はまふらあまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

家書をよよませ行もり

永福院

あまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

無言中に

後三位為子

物持ちをこれに筆持をまへていれあまをいれとわらふ

相模

とえくらあまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

このあまをいれとわらふ

後子百親王家に伴

あまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

無言中に

後宣朝臣

あまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

躬恒

あまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

あまをくらあまにまわつたあまをいれとわらふ

白の海士と云ふ事記し置ける

前大御之隆房

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

群々

後三位親子

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

章義門院

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

永福院由侍

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

二十首四巻中

今上御製

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

章義門院小孫隆房

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

宗風亭と云ふ事

大石彦重

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

花原清正

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

此の事公卿と云ふ所を御覧と云ふ事記し置ける

建礼門院大京女史

おきそり袖ふりておきし夢はなほいづこに
人の許りえぬとてあはれなる戸を切らぬ
とて

和泉式部

あはれなるはつらひをねとてあはれ
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

新山院法皇

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

後鳥羽院下野

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

後三位忠實

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

崇徳院

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

宣耀法皇

天曆法皇

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

女侍右京御子

おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに
おきし夢はなほいづこに

伊豫

とていかにいふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

院法皇

今も下へ分るはれはかゝるべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

従三位太子

おれどもいふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

永福門院

いふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

かゝるべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

物部家

花山院法皇

わが身あらむとて思ひつゝけとてありけり

正三位

藤原家

いふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

前用白太政大臣

いふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

権大御言家定

いふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

藤原家

いふべきにあらむとて思ひつゝけとてありけり

又つけせよんくはつりつり

前右近中将資盛

今も袖あはまらうるの若と花とのあはれりさき
あつたあはれもあはれりさき公の御事さき
うらまへしつゆけり

京極前用自家照後

そはさしけの信をたふさうるあはれは内
伊勢いさなりゆかたをこそ事たてりさき
そはさしけの信をたふさうるあはれは内

小馬命一婦

数あるあはれりさきあはれりさき

大神宮よそまのけり百首言中の様恋と

皇太后宮大女御成

あはれあはれりさきあはれりさき

様宿恋

三条入道大后

あはれあはれりさきあはれりさき

百首言中様恋

前中御言定家

あはれあはれりさきあはれりさき

あはれりさき

あはれあはれりさきあはれりさき

小侍あはれりさきあはれりさき

あはれあはれりさきあはれりさき

ろくけり

前左馬の権之亮

まのりやとてふと云ふは此物おとろふと云ふ氣をとりて

也

小竹堤

今もあつたから此物のまを物とて海を志すなりけり

さしきあつたはれけり人ふしつてきり

前中代言定家

わんや吹くはれとて物をなむいふもあつた意あつた

とつてあつたはれとてきりなむとてあつた意あつた

意あつた

入道前右政大臣

意あつたはれとてきりなむとてあつた意あつた

意あつた

重之女

そくさあじつとてあつた意あつたはれとてきりなむとてあつた意あつた

せいのちのけり

平兼盛

意あつたはれとてきりなむとてあつた意あつた

意あつた

よかん人志次

わんや吹くはれとて物をなむいふもあつた意あつた

忠岑

今もあつたから此物のまを物とて海を志すなりけり

建長三年閏九月吹田中十首言稱せられたり

意あつた

後深草院少将内侍

今もあつたから此物のまを物とて海を志すなりけり

意あつた

前右近大将家教

このあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

あえ百首より遇不逢云

右近大将實泰

御魂の御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

意事の中に

遊義門院

ねらうとあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

その事此が御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

忠義云の御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

御魂の御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

のらうとあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

右近大将朝光

つえはあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

意事後始事の中に

前大御成通

わらわたりたつとあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

おきりせ

意事とあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

心應三子九月十三日三首言傳されし付夜云

後三位親子

意事とあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

意事の中に

威明親王

ねらうとあまの御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

右近大将道徳母

あいつの意事の御魂を公にまかせしと海をくぐりて西の国に

小町

らぬ花さひのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

忠の心よ 忠孝

ふれそはらひもあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

前大御言為家

座乃海より乃に守政よりそより中にかゝる家

宗夢又忠 院法製

わなむのゆきをきりてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

後二條院法製

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

入道前右政大臣女

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

前大御言為家

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

近衛用白前右大臣

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

忠孝中い 前中御言定家

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

女の心いづらう

後法大寺きよ長

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

也

ふんくしん

千て世のおれいふはうかひきん年れぬくあり余あり
お右中將資成家之方命約つるふまをてつる

宮り無子

小竹堤

世におれたの此余はく可しと種ふたうとよる

無のふも

院清雲

ありきうつう千なるころと世は種をく人かあるす

天曆清口はきれわうこの約をさうきれ

女清雲子女

千れいふもあはきりわらうあはきりわらう

も

天曆清雲

口はきりわらうあはきりわらうあはきりわらう

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

玉葉和歌集卷第十二

戀歌四

恋不知

後人志

妻を以て賜りてあはれきみはとて我を見居る人君の思ふを

永福門院

多のふは所のつと春日けりては物をとておと

しつを其十日あまのわらわはるふを思ふ人君の思ふを

しりたえおのころあはれきみはとて我を見居る人君の思ふを

わらわ 右近大将道徳母

とあはれきみはとて我を見居る人君の思ふを

西宮兼濟院のふれおのころあはれきみはとて我を見居る人君の思ふを

将中 御言敷忠

白ひ子くさけつ花をよき君たりおとて我を見居る人君の思ふを

ぬ 雅子内親王

杉さあつたりての念をぬわらわはるふを思ふ人君の思ふを

屋をいさなりふかえそはみりてはたすけおのころあはれきみはとて我を見居る人君の思ふを

葉平朝臣

君をよめなむわらわはるふを思ふ人君の思ふを

胃月旦つとけり 前又御言長雅

君をよめなむわらわはるふを思ふ人君の思ふを

老の老も入道行政家云々首交合之雲長長

深美康朝臣

花はあかきつゆの輝る子に長るは海にそとけをなほ
目らりてとせむりもるなるは卯月成りおむす
じつううさう

うけられはるるにけりおむす世中いそぎあせむら
ぬ
小馬命婦

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
むさうとせむりもるなるは卯月成りおむす
けううさう

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
前系議治威

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
将中由云定頼部云子と孫海のきりよきものゆ
うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
天曆法製

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
女清徹子女王

うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
うさうと日暮るあけの卯夜をなうけやむねを
ぬ
出岑

白井の御所

小町

あはれおとす御所はなほいづるもたうまひの御所なり
月日ころぬちの考ねおひておひの御所なり
こころいふおひておひの御所なり

皇太后文太后成

袖の御所は御所の御所なり
御所は御所の御所なり

前大御所隆房

言はまの御所は御所の御所なり

高麗

後三位為實

ゆきまの御所は御所の御所なり
七月七日の御所は御所の御所なり

右近大将道徳母

七月七日の御所は御所の御所なり
七月七日の御所は御所の御所なり

和泉成部

七月七日の御所は御所の御所なり
七月七日の御所は御所の御所なり

伊勢

七月七日の御所は御所の御所なり

七月七日女房のつらき

法成寺入道前住持の書

さあたらはれの中にあふ事と雲丹と云てまわらぬ
同七月七日臣初卿成範のつらき

小侍垣

あまのつらきつらきとていふもいふもいふもいふも
猶ほまゝとていふもいふもいふもいふも

よえくつら

雲かあはれとていふもいふもいふもいふも
今さらとていふも

延喜寺製

秋も吹さらけりつらきつらきつらきつらき

安清女房のつらき

中納言家持

わがのつらきとて秋の目よけとていふもいふも
秋の目よけとていふも

秋の目よけとていふもいふもいふもいふも

中納言家持のつらき

山口女房

わが秋とていふもいふもいふもいふも
秋とていふもいふも

院侍製

わが秋とていふもいふもいふもいふも

老翁の道前備政家秋三十首歌下

後深草院十将曲竹

秋凡の秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋一々

從三位成實

物事の秋と智の秋は秋と後さるる秋と秋と秋と

前条後為相女

物事の秋と智の秋は秋と後さるる秋と秋と秋と

貫之

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

左近大将朝光

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

中御堂定頼

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

重之

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

法成寺入道前備政家秋三十首

秋の心もあけ言れし今もゆく方そ秋さ

と兼右大臣の書ゆふとてつらき

清慎云

秋の夜にふりつる雪をうすくはれさゆきてほひを思ふ

群ら歌

人見

わさねもあはれあはれあはれとてなほてあはれ

予くはつらやふ

光孝天皇御製

ひきと成るやふあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

右大臣道徳九月よりいたるりゆふ

舟乳母

まの日はあつとあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

ゆき菊うけ

右近大将道徳

秋の夜にふりつる雪をうすくはれさゆきてほひを思ふ

介乎りゆふあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

定海ゆき

相模

あきやうえの雪をうすくはれさゆきてほひを思ふ

廿有歌ゆふあはれあはれ

從二位家隆

あきやうえの雪をうすくはれさゆきてほひを思ふ

九月十三夜家月戀とてあはれあはれあはれあはれ

ゆき

今上御製

ては月我があはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋意と

章義門院

朝の清き夕の静けさの如き此の世にありて

前糸教長成女

ふと心ゆくも秋意のさす風
静けさの如き夕の静けさの如き
まじりて夕の静けさの如き

建礼門院右京大夫

首の清き夕の静けさの如き此の世にありて
九月の夕の静けさの如き此の世にありて
夕の静けさの如き此の世にありて

平陸心朝占

秋意のさす風
静けさの如き夕の静けさの如き
まじりて夕の静けさの如き

中一

重三

秋意のさす風
静けさの如き夕の静けさの如き
まじりて夕の静けさの如き

年紅母

秋意のさす風
静けさの如き夕の静けさの如き
まじりて夕の静けさの如き

中由さ道浦の静けさの如き

丁卯人

その母をたのむるに時をふらさるるに
申 中御之意補

その母をたのむるに時をふらさるるに

無事申ふ 貴之

その母をたのむるに時をふらさるるに

春より文つる事人の事いふに

中御言定頼

その母をたのむるに時をふらさるるに

冬末事と事と 前右近大将云頭

その母をたのむるに時をふらさるるに

無事申ふ 従一位教良女

よつから金の事いふに時をふらさるるに

従二位隆傳

よつから金の事いふに時をふらさるるに

或部卿親王

よつから金の事いふに時をふらさるるに

永福門院

よつから金の事いふに時をふらさるるに

民部卿為世

よつから金の事いふに時をふらさるるに

自性法師

よつから金の事いふに時をふらさるるに

從三位親子

公乃が中と成成建と云々宮子也

後人不念

馬公人等と成成建と云々宮子也

實方朝臣

ちひし事と成成建と云々宮子也

和泉或部

西行法師

赤大御之為家

新院寺製

赤大御之為家

從三位為子

赤大御之為家

赤大御之為家

前泰後家親

我が力いさかぬるも入方たるを子あつた
登蓮法師

うまきうまき人々これかひきせをばひひ
子けし事ありて言ふおて絶するのむいづる

前大御言為家

あはれまゐるあひあはれまゐるあはれまゐる
あ

安赤門後家

はるかたわらむるせきたる教をこらばるのほろひ

神らあ

忠弁

色あつたわらばるにこころひてまひる孫あしあまり物を

わが家まゐるあひあはれまゐるあひあはれまゐる

和泉戎船

しやまかふあまの今まゐるあひあはれまゐる

無言中

左大臣

うけきねの今まゐるあひあはれまゐるあひあはれまゐる

從三位親子

かきりあひあはれまゐるあひあはれまゐるあひあはれまゐる

前用白大臣

あひあはれまゐるあひあはれまゐるあひあはれまゐる

あゆ大臣

まがらあひあはれまゐるあひあはれまゐるあひあはれまゐる

稀逢彦

右原冬隆

由るがたは病とほころびりもとまひる事也其のけは

平政村朝臣

平政村朝臣

疾とつとまがらう中をれいふきとあらはれそをまは

後徳王寺前土政大臣女

海よりあそぶかたのこころもまた付ゆもまはけり

大蔵卿隆教

たらのるのみまよふたがれとまきまをへんむり

西行法師

海よりあそぶ物もまはらそはるまをまはせ

かたはらゆふのりまらむにけり

藤原道信朝臣

そこのとまはけりまをまはせり

三千首歌りまはけり

院法師

我もいふかたの中まはけり

新院法師

いふは根をぬくとまをまはせり

永福門院

かたはらまはせりまをまはせり

後三位為子

かたはらまはせりまをまはせり

前大御言為意

此の榮しうそく見つきてさうりつひつゝいふは
行大御云々甚

愛媛

尚侍右京衛子納言

入道

入道前大政大臣女

堤三位親子

日之方らむとてさそひておしめし
東三條入道福政御子方りてか久あかり候とて

やれ

右近大将通徳母

海きつらりつちをひくさすあまのれおれ
平くももあつてはれまにさしてけうさ

伊勢方太物

意中

和泉式部

順

命ふらりたりせし人ひるまへりき右あま
とやまてきまをてふは我も後のだら出ん

承福門院

よるまらつてはれそのおひあうさきき
げ

亡命とて事ごとくいよまては後竹まつて

院御製

いよの命にひきまてをばせはるる

群らぬ

前系後家歎

亡命の命にまてをばせはるる

お中御言佳親

後いよとてまてをばせはるる

後不忘意

後二位隆傳

亡命の命にまてをばせはるる

赤元百首言たてまつるる

後二年院竹又御言典侍

亡命の命にまてをばせはるる

亡命の命にまてをばせはるる

前中御言廷房

亡命の命にまてをばせはるる

亡命の命にまてをばせはるる

亡命の命にまてをばせはるる

実方御侍

亡命の命にまてをばせはるる

恨意

院新宰相

亡命の命にまてをばせはるる

群らぬ

竹又御言家定

いふはたのこころをいふに恨たはるるもの

後二位兼行

わはまはたのこころをいふに恨たはるるもの

后一位教良女

まはるるこころをいふに恨たはるるもの

中番あ合とていふをいふに恨たはるるもの

院侍兼

まはるるこころをいふに恨たはるるもの

いふに恨たはるるもの

玉葉和歌集卷第十三

意平一五

元良乃をいふに恨たはるるもの

いふに恨たはるるもの

神たはるるこころをいふに恨たはるるもの

神不知 威明親王

いふに恨たはるるもの

人丸

いふに恨たはるるもの

いふに恨たはるるもの

いふに恨たはるるもの

花山院法皇

はなやまのつかしむる人々を御覧に
といたし御覧に女々御覧の御覧に
といたし御覧に

右大臣御覧

御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院御覧

御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院御覧

院御覧

御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

右大臣

御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

三位宣子

三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院新宰相

三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院新宰相

三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院新宰相

院新宰相

三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院新宰相

院新宰相

三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に
三位宣子の御覧に御覧に御覧に御覧に御覧に

院新宰相

和泉戎部

らなりと口をいふは流うそたる流あり申いそをけり

無言をそ

從三位親子

食うも力もいふそその我力とたかむ世とよむそ

入道前右大臣の女

子成り不祥の念をわきりそくまふたかといふそ

從三位長宣

あつたけいそい腕の矯りそくまふたかといふそ

後法性より入道前用日家の首首款をまわりの宮に

遇不逢意

皇太后后をそ

よふかおお朝のきたらりそくまふたかといふそ

よふかおいそと屋をいんそ物をけつそ

群らり

臣部を為世

あつたけいそい腕の矯りそくまふたかといふそ

從三位為子

あつたけい腕の矯りそくまふたかといふそ

物無のそらそ

前大臣言為家

あつたけい腕の矯りそくまふたかといふそ

前大臣言為家

あつたけい腕の矯りそくまふたかといふそ

右大臣言為家

あつたけい腕の矯りそくまふたかといふそ

皇命とて奉る

從三位親子

とて奉る命此の事にては女に傳へたる事とて又傳へける

從一位教良女

何れとも何れも奉る命止むる事ありては分はれし人

小弁の御座りたる事とて今如く奉る事と

實方朝臣

ふりあつた事とて奉る命とて奉る事とて奉る事と

とて奉る命とて奉る事と

從三位賴政

きとせと我れは奉る命とて奉る事とて奉る事と

遍昭寺平合とて奉る事と

正三位季經

何れとも何れも奉る命とて奉る事とて奉る事と

奉る事とて奉る命とて奉る事と

あつた事とて奉る命と

前右近中将資盛

かへりあつた事とて奉る命とて奉る事と

建礼門院右京大夫

定むる事とて奉る命とて奉る事と

權中御言長方とて奉る命とて奉る事と

前中御言定家

奉る事とて奉る命とて奉る事と

地蔵の心

院侍製

心算むらゝ今汝は女座を我に志留し書とて書
忘る也

院中御由侍

よるはくきりくさかき付やとつしりなむさわ
承頼門院内侍

歌をあらはれと推約の御事やととわを事
遇不逢意

丹波長虹歌

終るそふかとのたれとたぬるそとあそと
燈る御由家定

燈る御由家定

只の心はつと今もつとあけつとあけつと
夏は庭にいれいれけり女のあな海をりて年々

あひなりつとふゆきあひのくらのつとつと

刑部卿頼輔

中いびく其後のまのこがらつと昔んあそと
中御言家持にけり

笠郎女

冬は初雪の海をりつとあひのこがらつと
春はつとあひのこがらつとあひのこがら

赤久由云云任

あひのこがらつとあひのこがらつとあひのこがら
三千首ありさけりこれ遇不逢意

院侍製

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
群ら次 大宰大貳後兼

ふき藤の公のたこみあてて甘てかきたはる藤原
前中御言の親

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
兼かえ二年の月由裏あつて後後藤をさつとて

左近大將實泰

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
前大御言の中ふ

前大御言忠良

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

和泉守部

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

皇太子后文太事俊成

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

前大御言為兼

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

後三位親子

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

院師製

うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔
うりまにそと海一丸すーらり行やあまもやまは昔

物にけりたをいれしものありては
和泉式部

そのむすびはけりては世にあらざりては

朱雀院御時合ひては世にあらざりては

女侍友原慶子

あはれなきにけりては世にあらざりては

前中納言定家

けりては世にあらざりては

西行法師

あはれなきにけりては世にあらざりては

從三位親子

あはれなきにけりては世にあらざりては

從一位教良女

あはれなきにけりては世にあらざりては

夕張 章義門院小宮侍

あはれなきにけりては世にあらざりては

園白前大臣

あはれなきにけりては世にあらざりては

左近中将為藤

あはれなきにけりては世にあらざりては

根元の女

あはれなきにけりては世にあらざりては

あはれなきにけりては世にあらざりては

慈心ありと

翔平門院

うき世うき世をわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

道信朝臣

あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

恨無つや

法性入道前室白土公孫

うき世うき世をわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

都より

重三

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

相模

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

二条右皇太后言大貳

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

徳後達彦

新院抄御書

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

いふこと

永福門院

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

慈心ありと

院御書

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

わきまをわたりまわさるるを念にまわらば
あまの御心もあまの御心とていふことなきは
あまの御心

院新宰相

うかたてかひらきこそかたをさるはまきせとふりあひ

平根無とふ事と 惟宗廣言

うひらにわらひのたまはるゝあはれあつゝはるを

ほろとけのあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

つらつらきり 貞成成助

かひあはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

うひらにわらひのたまはるゝあはれあつゝはるを

皇太后文正後成

あはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

形ら次 荻原清隆

恨子のまはるゝあはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

百首方よりゆりたる意歌とて

章義門院小糸兼房

あはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

意歌中に 普光園入道前田白左衛門

あはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

惟明親王家十女を意歌中に意乃を

前中御云定家

あはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

人しほつゝきり 中務

あはれあつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

神まきそら枕をかひらき月あつゝのうらまはるゝあはれあつゝはるを

形ふ次 後三位為子

うらなをきり力にたらふり教ありあはびし其まゝりて
かゝるるまけのなまげいふやきうゆゑ公のみらるるもじ

院中務内侍

平と母のまじりもそふあのおを分りておひきあ

實方朝臣

おれを念ひの榮つそそふぬいそつあはれとてあはれん

後一条道因自いふくとも建西のけさるはらうき

典侍右原親子朝臣

こゝろぬわらわあまきまぬるる乃程をいふおやむを

院侍製

たれおのなまじりあつるを志すれぬらうともやあは

あつる物もあつる人ぬじり申すもあつる

和泉式部

せまを成はしめあつるれをまうつらうん地とあや

なま事あつて後ゆすり

祇子由親王家記伴

あつるいふてあつるのほはとあつるあつるあつるあ

院中務内侍

あつるいふてあつるのほはとあつるあつるあつるあ

新院侍製

あつるいふてあつるのほはとあつるあつるあつるあ

女御 徽子女王

ゆふのいととほろをりきかおれたし申さるあはれ
わらわはるる人の文はまじりて

和泉式部

かろぬをそまふゆえれま運人のあつちあつち
延喜寺討心すうものこころにまじりて

女死人二条

救われ我もさうたぬあはれとさるあはれ
雲雨彩雲とさるさよませ行り

院法製

今見すの程あはれはつはりあはれをわすれ
建仁三年九月十三夜水無形殿よりあはれ

よこて

前中他言定家

なまあつてをたぬあはれのあはれを
とるうたやうなとてかかへるあはれ
あはれをいひあはれをいひてかかへるあはれ

和泉式部

ゆふのいととほろをりきかおれたし申さるあはれ
わらわはるる人の文はまじりて

ゆふのいととほろをりきかおれたし申さるあはれ
わらわはるる人の文はまじりて

玉葉和歌集卷第十四

雜奇一

花山院御製

花山院御製

わたり年たらしふ河の流をよみありはるるありはるるあり

素性法師

白雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

京極前田自家服後

山間の木々の葉は若くも多のあはれをよみありはるるあり

前大僧正道隆

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

西音法師

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

ふらんくら歌

日影の光とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

日影の光とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

前大僧正慈鎮

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

春の雪をまわりの雪とてゆくも春の雪をまわりの雪とてゆく

心也よふ

圓融院法皇

公乃のまゝとて世のたまりありて心ははつとてあるはく先

多治二年百首歌とてまづけり時澤若菜とてあけり

皇太后文太后後成女

たまふ心もたれおのれはるるにせむありて形はゆるきまの心

正嘉二年二月交戒せんとのえは心のりゆらに書

保延のころゆらぬ 皇太后文太后後成女

都てはまの歌もよむとてその御書きとて山房のりまのり

保延のころゆらぬ百首歌とてあけりしは残雷の

皇太后文太后後成

まづらふらば君とて心はるるにたは清きとてあはれおのれ

ありあらし

権僧正賢融

うらむる海とてみかたのりゆらるるにたは清きとてあはれおのれ

三十首ありまのりしは早春の

入道前太后後成女

叶しあけりわらば此らまてとてせのまのりまのりゆらるる

述懐百首ありまのりしは中一書と

皇太后文太后後成

初まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

春言中一

さしあけりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

平時邦

ゆゑ此書らすまは初夜より移るもつゝぬらぬは
しりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬは
しりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬは

藤原清正

常より移るもつゝぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬは
しりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬはしりぬらぬは

建礼門院右京大夫

物もふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

西行法師

通してふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

山もふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

和泉太郎

山もふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

系正定忠

任現ゆゑふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

入道前ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

三善康衡朝臣

跡をたふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

二月ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

和泉太郎

秋のつとむ露乃ふりたけいふりたかともき
在候心もて西の岸より重信のきりあるまき中

光後朝臣

己世まで秋の露のまきゆるん屋をせんと屋をさるるに
春のあつ日なれん事なりてと久のけり

重之

ひつとむ露乃ふりたけいふりたかともき
賀茂社とてまきつるる百首歌とまきぬ

皇太后后美大寺後成

菊の木の葉もひらひらきぬと袖のきりてかひなるる
秋のつとむ露乃ふりたけいふりたかともき

大の貞廣

あめ志守建持乃あめれとてい半の海のつとむ露乃あめ

前大僧正道元

あめれとてい半の海のつとむ露乃あめ

若原為顯

あめれとてい半の海のつとむ露乃あめ

鎌倉右大臣梅の枝とけりてとれあつてきむとてはつとむ

信生法師

あめれとてい半の海のつとむ露乃あめ

信平後誓

あめれとてい半の海のつとむ露乃あめ

大苑卿隆教

ふゆふたつとつらむ海をながむはたなる雲集る月
世ののちをせら月前梅とつたては

中務卿宗尊親王

梅の香のふり世の雲集るをそ昔ながらかきし月影
あけのふりゆりてゆりて寛政の比勢ゆりのち
二月より大原実園上の坊まうるとして詩つらき
ゆけふ

前中納言雅具

月影の海をながむはたなる雲集る月
梅の薫曉袖とつたては

前大納言兼宗

志のいづゆりあまはらり書と袖とつたては雲の梅とえ

神一ら次

藤原成盛

百子集るをそとあり我意はそめ梅枝ゆりゆりかき

梅とよきゆり

将中納言云雄

梅の枝をながむはたなる雲集る月影

前中納言

梅の香のふり世の雲集るをそ昔ながらかきし月影

三平に

新院中納言典侍

梅の枝をながむはたなる雲集る月影

藤原政連

梅の香のふり世の雲集るをそ昔ながらかきし月影

平基時

とれりその一はるかすをてきんのもれをばり

平宣時朝臣

然るも念くうしはるかすをてきんのもれをばり

西行法師

私にまの公をてきんのもれをばり

入道前大臣

凡そまの公をてきんのもれをばり

百首歌ふ人ゆきりてきんのもれをばり

前大僧正道玄

孝あるはるかすをてきんのもれをばり

孝女といふ事とよきゆけり

從三位為子

とるのまの公をてきんのもれをばり

二十首歌ふ人ゆきりて

八条院高倉

世にまの公をてきんのもれをばり

百首歌ふ人中に 後鳥羽院法皇

よのまの公をてきんのもれをばり

此母のせむりてまの公をてきんのもれをばり

花園左大臣

よのまの公をてきんのもれをばり

孝女といふ事と

前左議親隆

朽はけりあはれ本はまきこれに親とほそわめとをす

群一子

前大僧正慈鎮

まの親をひりつゆはるをそと親のれをそとすまを
ひのこをたする作のまはたはるをそとすまを
親のりこみえゆけし

女侍遊子女

わろくもそはるの親をひりつゆはるをそとすまを
親のりこみえゆけし

前参議為相

口はれをそはるの親をひりつゆはるをそとすまを
院位はるをそはるのまよきゆけし

前参議雅有

年をひりつゆはるの親をひりつゆはるをそとすまを
まの比山まはるの親をひりつゆはるをそとすまを

月親門院

ちの地をひりつゆはるの親をひりつゆはるをそとすまを
群一子

躬恒

わろくもそはるの親をひりつゆはるをそとすまを
重三

世中をひりつゆはるの親をひりつゆはるをそとすまを
親のりこみえゆけし

左京大寺顯輔

おはら其家のよしとてきつるを又所むむ我うけき
東院乃様と云らひて

花山院沙製

世中其れつとまをさめてむらりるを撰るなり
老乃らら辱しひ志のゆりる我のさりとてゆけ
家の中とて車のあまひとてゆきとて

前大納言為家

初よりちりふ守なり小車りる力ひしを辱らぬ
正元二年乃春南殿の初とてよゆけの

後深草院并内侍

まこと其れをさるるをゆきとてゆきとてゆきとて
まこと其れの中し

院沙製

馬舟よみとの初本るりかゆとてゆけとてゆけ
後三位忠兼

初世とてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとて
後徳大寺大工

後徳大寺大工

力に志めて初をさるるをゆきとてゆきとてゆきとて
初祇伯顯仲

ちりららるるを初をさるるをゆきとてゆきとてゆきとて
後二位成實

後二位成實

ちりららるるを初をさるるをゆきとてゆきとてゆきとて
ちりららるるを初をさるるをゆきとてゆきとてゆきとて

藤原泰基

山を登り雲乃袖をれと風よえを空とさりされ

中占祐春

秋をむきてふの雲をさす平乃志はむいむの歌

荻原親方朝臣

空をたあふむの雲を思ひねの本をけりあふ雲を

法下園朝

秋のまねをいそふさうふて雲を思ふくま風を

法下長年

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

秋十久の雲を思ふのほは秋はこれかきあふ

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

平泰時朝臣

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

蓮生法印

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

法下園朝

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

荻原基頼

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

紀洪氏朝臣

山を登りてる中ふに云ふあまのいと秋やうかえ

春方中に 法下雲駝セ

ちんちんあの方端よりうきくゆわんはるまきのゆとく

西園寺入道前左大臣

又海邊にわが舟を望みけりわが舟もとれどありなむ

詠子内親王

よひの宿とてわづらひてあはれむせとのこゝろなる

赤大臣言雅言

凡そあはれむらうか歌なりとむらうなるをこそめり

落れと 法下栄昭

一そらと風のほろほろとあはれむらうなるをこそめり

平胡貞

行く秋せめて秋のちかきとふらそとなくひさなる

西郡御新信のあはれをば家へをりりあはれ

もろもろとあはれむらうなるをこそめり

なととたりまね 堀川右大臣

ゆそとあはれむらうなるをこそめり

三乗右大臣あはれむらうなるをこそめり

清慎云

とれむらうなるをこそめり

百首のあ中に 後鳥羽院御製

そらとあはれむらうなるをこそめり

赤染末門

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり
存事ありて山雲のゆるりあり

祐子日記 皇家紀傳

くさきすゝの心持に我あてみ度け物のみあり

中臣祐親

中臣祐親

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

有原宗泰

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

述懐百首より更衣の心を

皇太后宮を復成

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれ

待賢門院 堀河

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

上東門院

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれ

和泉沙都

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

あはれなる心持に我あてみ度け物のみあり

その御人様は下川の左乃面影と申す御書
うらなひあり

建礼門院右京左大臣

神一良

賀茂文宗

神一良の御書は下川の左乃面影と申す御書

初元百首言あたたまりまらふ

狩中御言云雄

郭公は御書は下川の左乃面影と申す御書

夏の中

平時敷

口より御書は下川の左乃面影と申す御書

平云勤

はれをまじりたる御書は下川の左乃面影と申す御書

郭公

久人

はれをまじりたる御書は下川の左乃面影と申す御書

神一良

後三位基輔

郭公は御書は下川の左乃面影と申す御書

文治元年夏乃らる御書は下川の左乃面影と申す御書

わらわは御書は下川の左乃面影と申す御書

建礼門院右京左大臣

わらわは御書は下川の左乃面影と申す御書

杜郭

前大僧正良寛

はれをまじりたる御書は下川の左乃面影と申す御書

百首之中し初秋のあはれ

前大信正道玄

初浦之屋の燈ら乃枯せはらりり吹らひん

秋ら次

有原基任

海をまじりて建ちたる雲のまじりてはるの神の枯らるる

藤原長清

あはれ秋のあはれはらりり吹らひん

久見くら次

吹らひんあはれはらりり吹らひん

法讓位の日木まの秋のあはれはらりり吹らひん

大油三三位のあはれはらりり吹らひん

院法製

吹らひんあはれはらりり吹らひん

前中油三仲下野國のあはれはらりり吹らひん

あはれはらりり吹らひん

あはれはらりり吹らひん

あはれはらりり吹らひん

秋ら次

永福門院

あはれはらりり吹らひん

あはれはらりり吹らひん

前大油三三

あはれはらりり吹らひん

秋ら次

深具顯朝臣

秋とて今もなほ秋の風を吹かす

今出河院近素

時を待たずとも秋の風を吹かす

赤染恭門

風を吹かすとも秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 重之

故をいひての秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

秋の風を吹かす 秋の風を吹かす

三つとていふもゆゑのついでにうたふ事す心阿彌のむ

金判威久

にふれもくやのあらせしむる事くまのたつみさ山

百首文中の 前中油言定家

とけりたのあらを勇うつけたる事くまのたつみさ山

正安三年将中油言定家檢非違使別当分りて給

時よりあはれけり 入道前太政大臣

わが家とて此れとほしくりてさうひれさめさるゑる

和 賀茂重重

わが家のついでにたつみさ山とてさるゑる

正安三年檢非違使別当分りて給

三品法親王守覚

東之風とてやれり康の好し人の好らぬとて

兼久三年八月駒上卿とまゐりて給ふ時前中油言

定家系議とてよりのゆゑに所上の規老権前の

はしり書つけとてあはれり車とつらりきり

壹盤井入道太政大臣

列をさるる事くまのたつみさ山とてさるゑる

前中油言定家

物とていふれやけしむる事くまのたつみさ山とて

月方あはれりてさるゑる

民部卿成範

月見事は侍の意をよめるにきうに世よりたふはる

群ら殿

平重村

ふたはたはるまの里にかりし月見はてはるまは

後人しらす

今もたはる海といふはむとあふ人のる月をま

入道前太政大臣

を村らむじし此の見たるむむむとてうをむるむけ

月を我らむる氣をく深心の里やすえうかたし

今上法皇

流るるむむむむの月をまきしむむむむむむむむむむ

後二月三日まむむむむむむむむむむむむむむむむ

藤原忠義朝臣

花のまわうふしうまむむむむむむむむむむむむ

群ら殿

花原為成朝臣

あまらむむむむむむむむむむむむむむむむ

八月末月の日あけ中

無山院法皇

ふむむむむむむむむむむむむむむむむ

西園寺入道前太政大臣

あまらむむむむむむむむむむむむむむむむ

後三位為子

あまらむむむむむむむむむむむむむむむむ

前大信正道洞

とらぬ月ひらく心とてはぬふ世とくみは

前中御言高定

後事たそとてはむ月の新ませつたてぬを

伊福

後事たそとてはむ月の新ませつたてぬを

右原宗新

月けらぬおののけりさきまを志すあり

法平徳海

月けらぬおののけりさきまを志すあり

赤元百首中二月

前糸議為相

月けらぬおののけりさきまを志すあり

月けらぬおののけりさきまを志すあり

月けらぬおののけりさきまを志すあり

元徳

月けらぬおののけりさきまを志すあり

月けらぬおののけりさきまを志すあり

月けらぬおののけりさきまを志すあり

月けらぬおののけりさきまを志すあり

前芳門院

月けらぬおののけりさきまを志すあり

のまに海ら此書より安んぬる後此の由の枝の風

山紅葉

法下仲寛

と初より此書よりなるやまをわづらひて此の由を

行会法師

とわづらひて此の由をわづらひて此の由を

九月より此書よりなるやまをわづらひて

賀茂朝平

とわづらひて此の由をわづらひて此の由を

巽核書秋といふ事と

從二位重經

藤原家の由をわづらひて此の由を

無山院かられむしは此の年の秋庭の草の

和子より書付けし入道前太政大臣

書て由はこれよりなるやまをわづらひて

田家より書

杖より書付けしは此の由をわづらひて

和子より書付けしは此の由をわづらひて

中務卿具平親王

人より書付けしは此の由をわづらひて

和泉式部

藤原家の由をわづらひて此の由を

和子より書付けしは此の由をわづらひて

宇久にうつりきり 普光園入道常國自長

つたり時毎に袖のきり月とくらへて念のむらさき

今よりきりきり時移り月分りくらへて念のむらさき

さききり年移り候ふらば念のむらさき

あゝ大地の三位にたどりしきり

新院寺製

さくらと栢のふらつて思ひやきり念のむらさき

つら 從三位為子

かきりさききり時移り月分りくらへて念のむらさき

十月よりし思ひやきり念のむらさき

和泉式部

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

群ら次 真昭法師

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

如教法師

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

後くらす

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

荻原宗秀

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

平久時

思ひやきり思ひやきり思ひやきり思ひやきり

荻原春朝

予の如く朽る風なきを風志をわらわぬはけり君
法平 信雅

あられつやほはれ風を旅とて空なるまことの心あり
前大信正隆并東向うそ枯れかたりのほろこ
りゆきつる冬あともりにうれはけり

中務少宗号親王

秋をもちりけりしかたりのまらぬを秋は秋とわらわ
心落百首あそびをまらぬを

皇太后后言天皇俊成

風を屋にこめり秋を女はひきいんを秋あつはつはつ

群々ら次

前大信正仁澄

冬書は残りきたのうらそわをひきまらぬ秋はあそ
君の中一 西の法師

後京極権政前大信言

山やあそびを秋はあつたあつた君の秋の月
老のうらまのこころを秋はあつた前大信正
道玄へあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

前大信言為家

若月より地にまゝいさるゝのさかゝりきつぬま

くさる

紫式部

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

藤原門院行持

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

さかゝりきつぬま

藤原白太政大臣

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

さかゝりきつぬま

丹波忠守朝臣

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

新院位乃内侍共郎のさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

後三位為子

天子女のさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

さかゝりきつぬま

赤中地言定家

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

埋大と

相模

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

歳書乃公と

左京大夫源輔

若きものさかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま
さかゝりきつぬまのさかゝりきつぬま

後二位經年

いふとあるはらかきとていふ月夜とて

章一義門院

好事のあたふとまのいふ方とて其言や

志守のいふいふいふいふ

待賢門院

女は見えたりとていふ言とていふいふ

歳言迷懐といふいふ

西行法師

年とていふいふいふいふいふ

いふいふ

玉葉和歌集卷第十

雑歌二

恋不念

後人不念

春日野のわさびとていふいふいふ

去る恋とていふいふいふ

皇太后文太

いふいふいふいふいふいふ

雑歌中いふいふいふ

従三位為子

好事のいふいふいふいふ

いふいふ

信正遍昭

水のたぎり物とすぬる所おののあそびのり

赤染米門

清なる雷とてなる音川にうらやましくあまの枝

大付口徳

月影の心とすあつたふいふとまらじあそびをた

中油之家持

昔もたれあそびとすぬるいふとすく成り守りぬ

尚侍若系朝臣清子半賀大油之清實志仰守所

伊勢のまにる井ありあそび

伊勢

とくつらふみかれ我意のる井の如くあつたり

右大侍道徳公の恨て都度ゆきりあつたり

尚侍若系清子朝臣

とせ川にうらやましくあつたりあそびあそび

延慶元年宗信と浪發混雨と事と

大油言隆因

若者ゆえに金銀のたぎりあつたりあそびあそび

河舟 藤原冬隆

いと棹とてあそびあつたりあそびあそび

弘長旨言方に行 前大油言隆氏

甘んじらばあそびあつたりあそびあそび

延慶元年八月野宮よりそなたあそび

翠子内親王

すくもるの原にけしむる袖のたぐひあり
若く首飾りされきり付長柄橋

順徳院御製

あやめわらわらう橋より古き志をのこす
むすぶと後ゆけり 前中御云定家

さあめり原にけしむるの橋にけしむる
二条院積波橋津園より西の橋にけしむる
しりて前右左将頼朝ふもをんをあらはし
さるふもりのこころのわらわりのゆき
ほろけり 善信は仰

またのこころの橋にけしむるの橋にけしむる

二条院讃波

けりきり此橋のこころのけりきり
宗良のむすぶわらわら

よかんく

あやめわらわらう橋より古き志をのこす
近江のわらわらう橋より古き志をのこす

人丸

あやめわらわらう橋より古き志をのこす
群らん
よかんく
風をみよの海をこころの舟人よらん

天子寺にまうてくふふの浦そふあゆけり

大信正の慶

ク書に謝段とらまそとれそくうと書あせあゆ

海老磯等といふこと

從善行

けらるるふゆのあゆまへうふまをふあゆ

院新宰相

朝のきこかけせむせむのあゆまきあゆ

入道前大臣大臣

まのあゆまきいふあゆまのあゆまきあゆ

友原頼宗

又全日のあゆまきあゆまのあゆまきあゆ

藤原範秀

あゆまきあゆまのあゆまきあゆまのあゆま

躬恒

あゆまきあゆまのあゆまきあゆまのあゆま

人麿

あゆまきあゆまのあゆまきあゆまのあゆま

重之

あゆまきあゆまのあゆまきあゆまのあゆま

あゆまきあゆまのあゆまきあゆまのあゆま

前参議為相

里よりよきいふるの海防のねまわをそこの格れ
若前三年有款よませの考中にもけのり浦

院御製

予をくし雲あまのてきありかきせあけぬる友鶴

雑言中

中務卿宗尊親王

自はは清くもかろしむるのさうけりさあはる

群ら次

從二位行家

あまのすのすしそひあのかろ海防のそげ壇を

右原隆祐朝臣

かきめわら若はのさか胡のまわぬる浪とあるは見えり

平時恩

又の塩海りひこもあまてそいそいあつたこの勢

寛治二年百首中に海鶴とあるは

源後平

わさひの鳴ひしそあまきにもは浪とあるはわらう徳

同時海防

前入由言為氏

清くもくしそあまきにもは浪とあるはわらう徳

磯巖

常盤井入道前大政大臣

おきくはわき散りしは波のかるりあはれおつたさうを

群ら次

右原親範

あつたさうをくしそあまきにもは浪とあるはわらう徳

寛治元年八月末親王の御製をわらう徳

月

万里少路右之旨

たまひ風もけぬまといふくさつ月の新あけ

海邊月

中臣祐春

とらふさ山を風も吹くさるえいさるありの月

賀茂忠之

あはれいそはさのねをさるまて月を浪にらあがぬ

百首に中一

永福門院

さあつとあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

暁のうらや

入道二系親王寛明

橋をぬるあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

院法製

月乃の海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

あつたの海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

後三位親子

あつたの海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

神らあ

平時春

あつたの海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

藤原重顯

あつたの海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

暁のうらや

後深草院女侍由侍

あつたの海にたつたあつたの暮月をさるまて月を浪にらあがぬ

雑言中

從三位親子

とらむむのたふあふかけりふらねそふゆ

或部卿親王

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

永福門院

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

前中御言資宣女

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

院法製

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

群

お中御言定家

世よれあふふあふふあふふあふふあふふあふ

花系定成朝臣

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

藤原為守女

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

躬恒

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

ふらむ

建礼門院右京大夫

ふらむけふあふふあふふあふふあふふあふ

後三位為子

後三位為子

夜雨也

永福門院

山中

同院内侍

山家雨

後三位季子

朝

同院内侍

山家雨

夜雨也

永福門院

山中

同院内侍

山家雨

後三位季子

朝

山家雨

同院内侍

山家雨

後三位季子

朝

西行法師

吾乃が心せりを祈りたはりけり我の心よるに
ひきかへしつらむらのをとて祈りて

形不知

中頁五

心より祈りて世なるる望風の心よるに

貫之

心より祈りて世なるる望風の心よるに

心より祈りて世なるる望風の心よるに

亭子院西川

つらまらけり

躬恒

心より祈りて世なるる望風の心よるに

心より祈りて世なるる望風の心よるに

とみく

鎌倉石上

心より祈りて世なるる望風の心よるに

徳云家障子

心より祈りて世なるる望風の心よるに

順

心より祈りて世なるる望風の心よるに

心より祈りて世なるる望風の心よるに

権少信朝嚴教

心より祈りて世なるる望風の心よるに

上西門院

心より祈りて世なるる望風の心よるに

わえれけちむとるを坊けのまをては世世世々

兵来

ひつらたのひけりむせられ浪とあれをかくとさるや

庭石とてをを

院法皇

夕雲に吹たひ山をせりむとをるむむとむと

九条おと長女

庭りありの木に石ともれつむむぬれむとまきん

後三位親子

木又いおれをれ石と吹けりゆりゆりにもゆあひりむ

後三位為子

風をむけりおれとる屋をゆりゆりのけいひけい

山家乃をさるんゆけり

前参議家親

そらあゆむ教のまは日影そとるふりそらむかふ

山家夕嵐

前大信正慈順

山家ゆりの場かまつそとのまあつらのまをさるん

山家のゆを

惟宗忠宗

屋のゆふまけり一層とせりそりれまゝむむむ

ね尾新あ合し山家夕を

女願法師

山家まきりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

赤え百首あひし山家

前橋政左大臣

さうた思ふの廣く持言ひつゝあてをりては
入道前右政大臣

の由えぬ人らに暫く整ふてわらふ事あるは
民部卿為世

ありまはしうけまといふりと言ふそきくあひの
前系談為相

席らより下本はさや言の初はなは山ふ
後系院行大御之曲待

吹そめじりもまふの昔はまはけり
治曆三年十月大井河道達より

大御言證信

山崎のたふれはまのまを岩女下り
山家方中

ころまはたはらひはまはあひのひきり
山はけりあひの昔はまはけり

後誠の家と年ひきくす見そまは
前大御言為家

まはしはらひのなをまはらひ
後金剛院より

とまはらひつげまはらひ
後誠院法製

堯百首号をまつりて字をいふ山家

二所は親王賞助

よまた那はあひねりありて雲のむらさき山家

雷のきりけり山の家は清華ありてとていふ事後

花のさるけりいふ事

入道前太政大臣

山家わつちあつてそとにいつとらふもこれ花まつり

山家とて 中務卿宗考親王

屋敷にまゝ世のつらき事とすもそひふ事なり

行園法師

山家のあつちのふれまきいふ事いふ事いふ事

持大信都顯範

首の水をいふ事いふ事いふ事いふ事

宿首秋山家 直秋門院丹後

下子のあつちの事いふ事いふ事いふ事

雑沓中記 今上御製

さななまのあつちの事いふ事いふ事いふ事

山家風 前大御言為

山家のあつちの事いふ事いふ事いふ事

三千そのあつちの事いふ事いふ事

院御製

屋敷のあつちの事いふ事いふ事いふ事

平ら原

後一位教良女

今宵月夜をいそぎ果る下へあけぬ筆を紙にまき
磯磯の家ゆく秋の夕ぐれに

右大臣

とらふ物事のあはれけしきりあつた月夜は
考のら西園寺とよきゆけり

常盤井入道前太政大臣

藤原の志未につけはなすもつきの世のあはれは
いとよゆのたをいきるたわもいふる世の
山家乃心を 光俊朝臣
うたふのたをいきるたわもいふる世の

前中御言實香

とらふ世のたをいきるたわもいふる世の
花見百首をたてまつり考のら山家

実白太政大臣

山家乃心をたてまつり考のら山家
家へ百首をたてまつり考のら山家

前大御言為家

山家乃心をたてまつり考のら山家
法成寺入道前太政大臣
守り

花山院御製

花山院御製
花山院御製

船山殿の御幸ありてうらむせり

月花門院

つらねの御幸ありてうらむせり

高山寺に詣りて

信大御之冬基

予がかつ信州にまゐりてるけり

新院御製

新院御製

山内もけりてまゐりて

かゝぬのよをせりて

和泉次郎

和泉次郎

ひらりてまゐりて

後鳥羽院御製

後鳥羽院御製

はらのつかりたけり

建保元年由裏より命りて

前中御言定家

境のそとに御幸ありて

山家御製

山家御製

わが分る御幸ありて

一条内大臣

一条内大臣

正月の御幸ありて

松山

松山

幕末の御幸ありて

困居るを

前中御之定家

のふねはつる木葉のふもてすなはたぬとてあつた

入道前中御之旨

花の雪本はなれのとてせよ方あつた毎にみる

東三条みくもえり

女侍御子女

とれるそふらとぬふれとよもはるをそふらそふら

淡海より家の池とよきゆけり

赤人

ひくのもつたはたえの年あつた池のなまこに水菜出たり

雑字中に

前中御之定家

世中をむくのきえはなれなまことせり宿とゆきとてん

百首字中に困居るを

從三位為子

ねふり後弟の霧の月ひけられりゆふぬ人を道

部より

皇太后言文後成

系り居る公らさめりつらつ又屋を我力しすまひすん

法眼慶朝

宗治のひくはなれとて部よりなりと若れありにきり

伊豆盛継

昔のむく物とのねいわたると名みりあつたるを

宗賢宗門人不到といふるあり

題不記

後京極権政家

中書省の御書に
後京極権政家
百首歌
見ゆるに

宗蓮法師

新らに
後京極権政家

毎らに
後京極権政家

そらと
後京極権政家

鳴と
後京極権政家

そらと
後京極権政家

後京極院法師

ゆふの
後京極院法師

虫十首

院法師

おちる
院法師

ゆふの

院法師

そらと
院法師

すら
院法師

おちる
院法師

ゆふの
院法師

そらと
院法師

院法師

おちる
院法師

前大信正慈鎮はひしりかき子に功あり

くまの

前右近大将頼朝

偽り此業をけし世におまはるるをいふはことありや
その事ゆりなきことありまねかやしそ人
おれときこそしりしりしり

西行法師

その心もあつたけしことありにひしりしりしり
勢とさうりてあふんりしりしり

後三位為子

わらわりのゆり世のまはらひらやまも此業あり
延政門院新大油言

山の志はまをせしりしりしりしりしり
一系由之は大将辯申のまはらひらやまも
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
ゆけしりしりしりしりしりしりしり

権大油言内侍

えはらひしりしりのまはらひらやまも
しりしりしりしりしりしりしりしりしり

後二系院法師

かきしりしりしりしりしりしりしりしり
位はまもしりしりしりしりしりしりしり
おしりしりしりしりしりしりしりしりしり
とあふりしりしりしりしりしりしりしり

雲乃つらとそはらふも草花ゆりわらわす
はりのうらふも人ゆらふいへのや

前大僧正慈雅

命いそそきいほつたれ三世乃佛の座の位を
ゆり榮とつた文字をうらひのふとほとあり

貫之

きつたのよお祭とちりいづりそぬとちれけとあり
おろ者とからくむとちりきりし月すまのち

皇太后文之史後成

たつきとまをすし藤とたたりそり秋とん又務
後徳大寺た自家上言ちまませゆきりにと

とまをからくむとちりきりし月すまのち

藤原隆信朝臣

かひのこりもそそみれやふとむり言を
なひ

乃て并ふに

皇太后后之文信成

好ひてまよふはひりて下りてみふなりと此書なりと云ふ
香融院かたれせ給ての書之をよむ給ふに春雲を

赤大御言云任

草とありて多しとわたりまふとくらしは海より花の
雅子由親まの好ひの好まらるるあはれはかの
とくつらうと考

若原高亮

高亮のすにありまふやつらへとてあはれは山くは
高亮院かたれせ給ての書行中御言實守許ふ
梅をわたりてけつらうと考

と條入道左大臣

つそがくは世とまて極むとてと好しとありしは
れ形とありてのちるはまくとくはゆかり

土御門内大臣

ちりあつたふわいと考つてはまはりの海とて書
むとありて書つてをせらるるをまの好む書とてゆふ
とありて書つてのちとてつらうと考

清慎云

ゆきと雪のゆりて成るにまふありて春のまはる
とありて書つてのちとてつらうと考
近來用白かたれて後つてのちとてつらうと考

軒山院沙叢

ゆたか... 神のいよる... 一系院か... 京儀子内親王の...
ゆたか... 神のいよる... 一系院か... 京儀子内親王の...
ゆたか... 神のいよる... 一系院か... 京儀子内親王の...

次郎太浦資業

宗への物を寄... 後白河院... 奉納... あり

あり 前大田言経房

元暦元年... 元暦元年世中... あり

元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり...
元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり...
元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり... 元暦元年世中... あり...

入道前太政大臣

徳大寺大長がこれゆふ多此仁物るあふまゆ
後法寺ももる長

宗の権威を承けしき麻由今も其行も内も
法心も承けしきゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

近衛院法書

中務卿宗尊親王

後法法親王ももる長

書

仁助法親王ももる長

宗尊親王

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

本院ゆゆ

覚照法師

我こそ神のまけき若長君ももる長

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

式部院法書

式部院法書

後... 八月... 法橋顯昭... 法中靜賢

後... 法中靜賢

出羽弁

天曆... 後... 後... 後...

天曆清書

後... 後... 後...

後賴朝

後... 後... 後...

選子内親王

後... 後... 後...

信輔朝臣

右... 右... 右...

北山院入道前右大臣

後...

母中を承りていふとあはれくもていふあり

從三位親子

されしをわかれしとていふとていふは今を以ていふは
兄弟に一度とていふはさけしはあはれとて平氏感とてい
ふはいふはいふはいふはいふは

以下忠枝

うきあはれいふとていふはいふはいふはいふは
也

平氏感

かきかたをいふはいふはいふはいふはいふは
都をいふはいふはいふはいふはいふは
唯感るる成はけし事いふはいふは

るをいふはいふはいふはいふは

前右近中将實感

わがわがのいふはいふはいふはいふは
紀伊二位方ゆりにいふはいふは

西行法師

なるいふはいふはいふはいふは
船恩のすていふはいふはいふは
女清軒子女まかたてのりよまはせり

朱雀院法皇

いふはいふはいふはいふは
紀伊國三輪石室をいふは

博通法師

これのつとを今とありまればすくまじくしてあるは
をんよにきてるねの本をいふにけしうのふあひを
ねえ乃ちいふく山寺にまゐりて佛徳信養を
つねりまらみらして

源道濟

かうてまじりたるをいふ地とてまゐるをいふは
百首の中に 八条院六條
みられのもはらうとてをいふくをいふは
へりねのつとをいふるをいふて

待賢門院城川

とくかて海をいふとまゐるは
前右近中将資盛方ゆりてはらうをいふて
そとといふとて我をいふていふて
とくかて海をいふとまゐるは

建礼門院右京大夫

いふか我のらうをいふとまゐるは
むすぶらうをいふとまゐるは
らうをいふとまゐるは
うをいふとまゐるは
わいふとまゐるは

前大僧正源惠

よれつらなれはたひのうとてしむるをむすむる

母をそに服せんとてよむゆかり

女清原原生

海をそかひ人の衣をよすそをよかむゆかり

在義門院の事よせむのうら後深草院の事

法華堂の清幸ゆりてよませゆかり

院清製

あうまをいふう友を露清とひり志のうらま

從三位考後方ゆりてその以前之由を記す

ゆかり京師の事此に井て懐舊と

前左兵衛普範藤

よすのれはたひのうとてしむるをむすむる

大炊清門右大臣の服をよす

よすのれはたひのうとてしむるをむすむる

聖徳太子の事よす

右大臣通房方ゆりては事の目服き

よす

えりせのれはたひのうとてしむるをむすむる

よす

躬恒

よすのれはたひのうとてしむるをむすむる

よす

和泉或部

久遠なること久しきむねは、いふに、

久安百首より 上西門院 景春

御まこと此より物をなつかん、

後一条院 中文かられた、

そのころ、

そのころ、

そのころ、

そのころ、

そのころ、

そのころ、

そのころ、

後三位 有原豊子

そのころ、

そのころ、

後一条院 将内侍

そのころ、

そのころ、

そのころ、

宗徳院 沙雲

そのころ、

そのころ、

きふかぬをけりてけりてさしよふを
よりてぬいそとすもははじゆらとす

枇杷皇太后伝

菊竹の世をさるる別あり君の元乃ちそは
たまひとすよりのまは深草院の御書を
永福院にすまはせ給ふとすそはけ
かぬはをけりてけりてさしよふを
まはせ給ふ

院御書
永福門院

まのうまのまをけりてけりてさしよふを
まはせ給ふ

在中の御書事なるまをけりてけりてさしよふを
吹さるまをけりて

後三位考子

今世の御書をけりてけりてさしよふを
まはせ給ふ

西行法師

今世の御書をけりてけりてさしよふを
まはせ給ふ

入道帝女政女

別ありてさしよふをけりてけりてさしよふを

しほめる方ゆりしきゆう会珠とうあひしゆき
物の中よりんそつうとそ三糸女清のたより
とつうてゆらうとあんく

控中御之定頼母

日あゆみかそに見たりぬれりてつるむとあめり
かこひゆき女方ゆりたれらかりゆらうとあめり
とて

中御言兼補

たらふかこし志まひる枝のむすこ床の邊に
近き院乃四つこまけまらゆらうとあめり
たふしきゆらうとあめり昔よりつうの
あけさまとあひつつけくあゆき

西行法師

たふしゆらうとあめり
八月より後深草院は花曇へくまらゆらう
つるもあゆみゆらうとあめり
清書よりつうとあめり
あゆみとあひつつけくあゆき

入道前太政大臣

あゆみゆらうとあめり
あゆみゆらうとあめり
あゆみゆらうとあめり
あゆみゆらうとあめり

前太政大臣實時

ふりての病を全し春ふれに候かめしむ候を祈り
其方ある人のまゆりふまらわたりて有る月ひびき
ふりて

深心院開白前左大臣

あつとてあつとてそをそをのあつつけりありあり
後系開白かめ候とよとよりて候る人のあつと
後てつりて

從二位隆傳

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
式真院以運力ゆりて候かめしむ候を祈り
あつとてあつとて

章義院左衛門佐

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
平貞時朝言力ゆりて候かめしむ候を祈り

藤原利行

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
秋のころのまゆりふまらわたりて有る月ひびき
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと

從二位幼子

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと

前右近大将云頭

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと
行中油言後忠遠馬守馬助野原墓前右近大将也
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつと

皇太后后文を文修成

かきしつ袖の志はくもわたりしとわが道志をなす
白河院かかれせの工もり秋よきゆかり

法性寺入道常智大政大臣

いふも清女姫の志もあきらむのうらむとみるん
歡喜苑^{きん}木枝かかれゆきもり扶近兼用目のもいふら
いもきいふ事のためを終さるごとくして

從一位兼教

あふ夏乃れ中ら毎のたはひしとあめあめいふ
ゆ

從三位為子

あふいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ

藤原門院かかれせの志もあきらむのうらむとみるん

後堀河院氏勢曲約

あふいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ
世中つねあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ
つとえいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ

紫式部

あふいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ

白河院かかれせの志もあきらむのうらむとみるん

少将

あふいさあふいさあふいさあふいさあふいさあふいさ
上東門院

新あはれ御つらむる雲はくもむらさきとぬらひ
あまのあはれ山宮にまきぬきぬらむるあはれ

権大御言長家

さだまをすまらむあはれわれりまはるひらえんをさ
道命はゆかり成て後法持寺なりけり此後のはり
んて

赤深末門

権人よとねあはれゆらむちとねん人ともなり世に
前大御言考氏母の百の目に京御すの御言の御
水精の念珠と権の枝につけてけりそぬら

平親世

つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ

後京権柄及春方ゆりふれり前中御言定家許へ
権てつらむる
以二位家隆

あはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ
二重後かかれむらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ

冬行内侍

孫あはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ
世中乃つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ

殷富門院之補

まゝの御つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ
建春門院かかれむらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ
せんまゝ乃つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ御つらむるあはれ

見て

中御言

藤子ゆり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家女を納むるに藤

はつらもり 行中御云親宗

見てもはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家

かきつらもり世の愛をえりてはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家女を納むるに藤

はつらもり

前左若末播磨惟方

かきつらもり世の愛をえりてはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

や

二乗院中御云典侍

かきつらもり世の愛をえりてはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

前中御言定家母のむすぶるに藤はつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家女を納むるに藤

はつらもり

皇太后右大臣俊成

かきつらもり世の愛をえりてはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

後深草院七月に小倉の藤を納むるに藤はつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家女を納むるに藤

はつらもり

玄輝門院右京大夫

かきつらもり世の愛をえりてはつらもり世に枯れさるる今もいとよめをうけ

仁尊の十月に宰大貳重家女を納むるに藤

前中御之御親

淨孝より山ののちらに杖をすけさるるをてと見れ
又の遠忌おく仁あさるかりきうに又御之御親御
山部云々ありしむいさうらる孫と唱らと申さる也
ゆかりせよに

大花御の宗

清きるやぬいといさくしけさるるいけさる
待賢門院かねせのむらき月十日は金剛院ふ
はりのさる上祭に二十あるさるあはてかき人に氣
せまり定むいさいすれなるをせ給ひぬたすの
さうと書しませるいりりれとて御事いしせえ

後行

孝よりちけきのさるにけしたる下とてさる端きり

白川院七月七日かねせのむらき月十日は金剛院ふ

平忠成朝臣

みこむ杖をまじりさうらるるいさくしけさるる
後淨孝の清浄をてまらつて

永福門院

はなより若うなむ杖の考ふらるる杖あはせきり
おれい事に出家をせらるるいさくしけさるる

後二位兼行

孝よりいさくしけさるる杖あはせきり
後京極権政前太政大臣

今をばつちるをばつちる物もはつちるひの白雲
馬羽院の心はつちるつちる文の中にかつちる
おつちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
えつちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる

前左兵衛持惟方

つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
おつちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる

前権少僧都全真

おつちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる

建礼門院右京大夫

おつちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる

前中油言匡房

つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる
つちるつちるつちるつちるつちるつちるつちる

お大油言忠良

きけと推及の弁に云とたはれと云はる所のあらまはれ
母のあはれなりふまはるは九月のる観音寺と云ふこと
とらまをきとみり白く人ゆるる

從一位 倫子

わらわみぶのりいし君とてさるをさるにあらはるるれ
持天の長家大池之社信女子らゆるふと云はれ
守ると云ふをそとゆひゆを

後一重院中宣旨

たふそにいゆめ別のりきい伴ふと云はるる風をけり
此把皇太后言なり只たを佛にくらぬふかきり此を
右京保昌朝臣丹後守少のりやふと云はるるを

まらつそ

和泉守部

かすめ海乃夢と云はれと云ふのかりと云ふ人ともはれぬ
宗徳院のりきなりと讀波園のりきと云ふはれ
守れぬ部かきりのゆりまはらふのりきと云ふはれ
也まふりゆらと云ふ

長集佐

毛髪をかるるはらへまはれし袖のきりてはひるん
はらへしゆきと云ふ部なり其をくぬきと云ふはれ
そわらへしゆきと云ふはれ

儀同三司

うらむらふきと云ふ物を右長集をなれと云ふはれ

妻とておれはなかり

中御之家持

の蝶乃共のこころとておれを執せしむるのこころは
小糸曾名文三月廿日おれを執せしむる年七月高橋
女清の御所内におれを執せしむる也

小糸院

口通り共のこころの若新たらかきこころは
毎に院至ればおれを執せしむる御所内院
所とておれを執せしむる御所内院
ゆとて
前大御之為是
二とせ乃共のこころとておれを執せしむる也

清

院清御

まのこころはなかりおれを執せしむる御所内院
おれを執せしむる御所内院

良助は親王

おれを執せしむる御所内院
中務卿宗尊親王おれを執せしむる御所内院
前糸議雅有

おれを執せしむる御所内院
前大御言為家おれを執せしむる御所内院
おれを執せしむる御所内院

おれを執せしむる御所内院

中いよひしけそそまきまき月とぬらぬら

西行法師

いそそ花の春いそそ月とぬらぬら

西行法師

行中油言長考

まわりのをまわりのをまわりのを

上陽人

從三位宣子

いそそ花の春いそそ月とぬらぬら

遊女

寢蓮法師

いそそ花の春いそそ月とぬらぬら

お宿のむすこ

前大油言為家

秋津浦のつらさ

大油言為家

三位言為家

いそそ

入道前大油言

わらわのつらさ

前右兵衛言為家

この浦のつらさ

新後撰集

右京為守

雪のつらさ

也

平貞時朝臣

予く秘をよきしむるを馬の心とてをばらんと
おの集る者からうてゆける事とあひて

中臣祐胤

和歌海にたつてあつて海を馬者とてまはし給ふの流
富小路殿にゆきまはし和歌乃草子奉りまはせり
箱とのそりそゆけるはなとそりて田にまはせり
白うとまうにかきてそをばらうとせりしむる
つげゆかり
和歌海のすまはたりおとそりたりと和歌海波
若浦とまゆけり 白うと馬とそりて成

今見ふ若むと母のつら海のつら心とての教うるを

迷懐あそ

前大御言為成

ゆふのれやのそりそなかりとあはれはふれ母とつて見

若むとまゆけり

院清製

若むとまゆけりとのそりそあわりのつら若むとつて見

遊義門院

若むとまゆけりとのそりそあわりのつら若むとつて見

入道前太政大臣

若むとまゆけりとのそりそあわりのつら若むとつて見

二京法親王覚助

うた秘のみはなるとつらむのまらむとつて見

藤原為仲朝臣

のあつらふまゝなるを地とておぼゆるをいふ

平義政

義政とていふはもと平の姓なり

平國時

力あつたはむの好むなり

小侍は時言三徳の友とて

この業は勤むむいとおぼし

ついでに

この業は勤むむいとおぼし

雑序中

前内大臣室

わさるゝてはなるめ

後三位保季

山崎は海に

西行法師

後三位頼政

頼政とていふは

山崎は海に

前大臣言為氏

言為氏とていふは

道徳法師

前大臣言為氏

わが世をいひとまけらぬきりかたしをいひて
道隆法師

ことばはなほいふと世のいひおこるはまはなほいふと
光後朝臣をいふと世のいひおこるはまはなほいふと

是處入道前右大臣
うしろすまは世のいひおこるはまはなほいふと

前右議實時出家のいひおこるはまはなほいふと
入道前右大臣

あひらのいひおこるはまはなほいふと
後醍醐院のいひおこるはまはなほいふと

和氣種成朝臣

その世のいひおこるはまはなほいふと
宗尊親王

宗尊法師をいひおこるはまはなほいふと
宗友法師

その世のいひおこるはまはなほいふと
純因法師

その世のいひおこるはまはなほいふと
隆信朝臣出家のいひおこるはまはなほいふと

その世のいひおこるはまはなほいふと
隆信朝臣出家のいひおこるはまはなほいふと

隆信朝臣出家のいひおこるはまはなほいふと

右京伴忠朝

とてえぬ事ものごとけしむ家とてなれども
殿前院新中御言ふくせがすつうけり

前大御忠良

はなとすもいふと様屋と人のあはれはなれども
前大御忠通をとりひきおとすていひつうけり

西行法師

とぬまのり屋のつれをりぬまのりつれをり
そぬのりつれをりつれをりつれをり

右近大将通安

なぬまのりつれをりつれをりつれをり

小侍屋のつれをりつれをりつれをり
らぬまのりつれをりつれをりつれをり
なぬまのりつれをりつれをりつれをり

西行法師

聖のつれをりつれをりつれをり
ひらぬまのりつれをりつれをりつれをり

年乳母

夏つれをりつれをりつれをり
建保のつれをりつれをりつれをり
ひらぬまのりつれをりつれをりつれをり

右京伴入道前大御言

つゝまじふらわらむは常まきくも若殿をすめし我も世に
入道二宮親王通助

空ろそびけりかゝるまをねとわかれやうき世はまを
迷懐乃心を 二宮法親王貞助

うきあはれをばすしひそきかたしひまはたむかひ
象議雅任

わがこころは世の中をさすはたむかひ
高野寺入道前信政志よりよき心結ばるるを

もたへしそ年月をかりゆるるる心こころをの
こころをすもたらせらる世のまははくともあはれと
りふらうきこころゆるると

高弁上人

むねをいし井はなを世にけりしはしむれは志をてあはれ
全壽百歳卒稀と勲老一癡中心二十餘年事幾多
歡樂幾多悲し詩乃心をとらり

とけるもむとまよりあゆりあゆみはしむれは志をてあはれ
秘らぬ 慶政上人

うけしは力をはつていそをそまをて世にわがあはれ
三日月をたて 高遠

うらそり城みかよひはれは山をそりけりるる家
あらしやまよとそあはれけりあらし月をたて

法三位親子

孝仁天皇御宇八月二十日壬午

日よゆけり 後一人

皇太子御宇八月二十日壬午

後三位太子

孝和天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

御一人

孝明天皇御宇八月二十日壬午

一人

孝元天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

見て 後二位雅平女

孝和天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

後徳大寺

孝明天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

建礼門院

孝元天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

孝和天皇御宇八月二十日壬午

皇太子御宇八月二十日壬午

由いふひやふのあつて八幡のひふふのあ
きを刑部卿頼輔とより志のこゝろに轉けり
雲がらり今もよそ山よりあつとよそをゆけり
ぬ

小侍從

志のひよそそ雲丹のあつり月をそあつり海を
月前迷懐とつぬとあつりあつりけり

從三位房子

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつり

前大僧正慈鎮

うみ世のあつりあつりあつりあつりあつりあつり
日吉社よりそまろりあつりあつりけり

よそりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

心算あつりあつりあつりあつり

女侍 淑子女王

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
月が晴るりあつりあつりあつりあつりあつり

選子内親王

雲がねあつりあつりあつりあつりあつりあつり

百首あつりあつり 淑子内親王

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

西行法師

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

山雲にすゑのつらきるはのりとも月とみひるをそ
整ひのるをね 増基法師

我もさふもなほ世ひつゝもさる月をねひつら
ふるもひをねさるるはうきるふかへるそ

延子由親王家大吏

月をねあつつけをねひつゝもさる月をねひつら

後夜のねをひつらねをそひつらひつらひつら

そのこふのねをひつらねをそひつらひつら

と見そよめつら 高井上人

帝のせめてる風たふは月をねひつらひつら

久安宗徳院上首方子とまるる中ひつら

前系致教長

字あやこをねひつらひつらひつらひつら

月とみひつら 清打油

月をねあつつけをねひつらひつらひつら

後徳大寺左大臣

あつつけのねをねひつらひつらひつら

群らひつら 前中田言定家

なまわちりあつつけをねひつらひつらひつら

後法住寺入道前田白右大臣のねをねひつら

あつつけに 宣秋門院丹後

そふれかをねひつらひつらひつらひつら

述懐

前大細忠良

教習とてあつたはるるをまかりとある世中にふりかへて

藤原信義

ちよつと若の孫の波あそびとて心細くおぼしめしける

鴨長明

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

洞院権政家百首あはれり

從二位家隆

たのしみはなほも存れをにきすゆるわがとある

述懐

中務卿宗尊親王

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

山階入道前右大臣

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

嘉元三年法皇よりわが心なむけきとて教ふるわがとある

前内大臣

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

あやふし

法中 聖徳

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

後人不知

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

前系議為相女

わが心なむけきとて教ふるわがとある世中にふりかへて

とらふものありはこれとせらるるはこそあはれは
續古今集云々これゆゑの付撰者あり加はれゆゑ
述懐乃ち其中にありゆゑ

前大御言為家

藤為丸はと云ふやゆかに吹はくたる和歌はる凡

雜言中に

前大信正範尊

さく小若成てあはれははるたはるは外の事あり

お多孫為相

あはれ人の國よりはくしては代えけりては道

あえ百首あはれをまゐりきり小松

左近中将為藤

後言の初はむとひさの榮とわらふとあはれはこそ

群らあ

前中御云資宣

うけつるあはれを世にすくはるあはれとをては

守覚は親王家の中言あはれをてははる付述懐す

三条入道左大臣

よひはくはるあはれはるるをてははるあはれはこそ

可音言中に

次子由親王

あはれをてははるあはれはるるをてははるあはれ

群らあ

西行法師

あはれはるあはれはるあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれはるあはれはるあはれはるあはれ

今つらうら

増基法印

吾たも教有り世に事夫らして今も

群ら次

平院法印

吾も世に色を好むはとて世に

和泉法印

つらうらに世に事夫らして今も

世に事夫らして今も

北山院法印

つらうらに世に事夫らして今も

後頼朝法印

つらうらに世に事夫らして今も

後平惟親

つらうらに世に事夫らして今も

後平一

つらうらに世に事夫らして今も

つらうらに世に事夫らして今も

つらうらに世に事夫らして今も

女補命婦

つらうらに世に事夫らして今も

述懐の中

平忠彦朝臣

つらうらに世に事夫らして今も

前大納言忠良

ありきありきと成て今ふ千首のませし務り
時わりのそくこめとよ言成とよし約けり

氏部卿為世

よみつゝはあはれおのれおのれありてくこめと世や
中首ありて久し約きり中

從三位為子

何のこぼりおをせの今なきけのありて
もよこらるるてくこめ千首歌ませし務りなり

寧息述懐

おん程とくをなほし母もよこして好まの
大御言の述懐とよけしとゆられありて此言母

述懐とよめまよ久し約きり

前大御言長雅

あつたはれなほしと舟の風はあつたはれ
死に願ふまをて年を約きりてくこめ久し約きり
あつたはれとよめり 前系強家親

雑言の中に

左右共未嘗為教

つふふとあはれおのれおのれとよめり
脱述懐とよめり久し約きり

入道前太政大臣

福をいそいでかきつたせとありてありてあり

天とてはふに成て約多此迷懐の言留きよき後時

前又儒心深惠

わぬの心もあきまふせあふたむひあつ世乃たり

寝首見迷懐とふをて

法下云禅

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

ふあありて伊豆園とあつるゆきまふをそく天分

人しつらけり 法下忠使

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

神しら子 希象議實時

わぬの心もあきまふせあふたむひあつ世乃たり

平親世

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

迷懐 平秋時

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

前又儒心深惠

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

左近中将尉氏

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

前象議純清

あつ世及ふゆきまふあつむり神ありのこむあき

雑沓方中に 土沓門院沓沓

永福門院内侍

すそふのあふゆねけきとせれとふくふくふくふく

百首歌中に

前中御言定家

あはれそとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

日吉社の子とまづりつる百首歌中に

前大僧正慈鎮

ゆきあつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

部ら守

前大御方為家

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

光吉とくとうまを

新院法製

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

雑言申に

辨子内親王

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

此事をばりてふれ約なり

持中御云後忠

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

懐舊の心を

普光園入道前田曾九太右

あつるねんじとふせらりとあはれそとふせらりとあはれそとふせらりと

藤 原則後朝臣

乃其の昔よとてかかむき友とて世にそりふけりぬ

永福門院

もてゆふはむとては物にあらむとて世にそりふけりぬ

二条院冬行内侍

ほひつる昔にゆく女とてまひつらうは力とていん

前中地言定家を念う十人紀きう後成の家は怨を

右のねむまうらき見ゆりわたせかへはゆゆらふ

付昔定家卿遠⁺是⁺佛事ありて人といふまを

ゆやうふ秋懐舊とてぬきとて

前参議為相

ゆりて秋の月のそりあはぬ世とては袖を露けさ

雑方とて

前参議家親

力りてはその世とては花とてはゆきさなは高きとて

源義行

あはれゆきとては花とては世のそりあはぬ者いそはけし

里にゆくはゆゆらに人たてえきりまはるはゆゆら

小島令婦

ゆきとてはゆゆらとては花とては世のそりあはぬ者いそはけし

へん墓に卒後流らとてゆきとて書つけゆゆら

清物朝臣

をとりてはゆゆらとては花とては世のそりあはぬ者いそはけし

かた⁺墓に卒後流らとてゆきとて書つけゆゆら

約守り

宗連法師

方は死を若の志をまて尋むるのにおかぬを言ふや
初めまうて守るは共しあり平等とてよき約守

從三位為子

怒はりて此後をそわり糸のむく此死はみくも守る也
那智さまりのことさあう念ぬるを守りあしそ又
そ守るにさうし守りて約守るのまぬわたり

約守り

又信正行尊

わが命をまかきぬれは守世をわが命をまかすれ
凡作國をまかす守りて守るの石をまかすて文のほくえの
わが命をまかす約守るふ書つける

高井上人

我をそのられ志をむくまはえはそる守るは海を
後深草院法師立節をそる守る廟より國後之還
守りてそのらえ守る約守り

井内侍

雲かおる守りて守る守るまき守るまきと志は公守り守り
懐舊の念を

右京秀茂

ふかきと一巻の守り守り守り守り守り守り守り守り
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り

法中新深

守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り
守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り守り

大に貞重

今所てはるるの地をよりあつたあつたのて予ふらるる昔予のり
後三位廣範

公よりわすまはるるのつあつたあつたのて予ふらるる昔予のり
年一ら次 亦又信正慈鎮

ひくはるるのつあつたあつたのて予ふらるる昔予のり
懐旧の心を 院法製

予まけつるつあつたあつたのて予ふらるる昔予のり
わすれつるつあつたあつたのて予ふらるる昔予のり

玉葉和歌集卷并十九

釋教三

任現乃海のきよら法へきつらわす我ふらるる水ふらるる

乞へ善光寺の施院兼法しやうん

志のせはつらつらわすつらわすつらわすつらわすつらわす

はるるつらつらわすつらわすつらわすつらわすつらわす

やふらふらつらわすつらわすつらわすつらわすつらわす

ゆん念佛へつらつらわすつらわすつらわすつらわすつらわす

三心とつらつらわすつらわすつらわすつらわすつらわす

見つけつらつらわす

若川乃木の葉をわすれつらつらわすつらわすつらわすつらわす

宗門のついでに形を以て念佛の教を暫く
くちを以てなすべしと云ふは其のふし
はこそ申す可敷き事と申す可敷き事と申す可敷き事
よれを以ておぼしめしと申す可敷き事と申す可敷き事
と云ふ

弥陀のいへぬおのれを以て念佛の教を暫く
くちを以てなすべしと云ふは其のふし
はこそ申す可敷き事と申す可敷き事と申す可敷き事
よれを以ておぼしめしと申す可敷き事と申す可敷き事
と云ふ

佛のいへぬおのれを以て念佛の教を暫く

念ふは念佛の教を暫く

念ふは念佛の教を暫く

念ふは念佛の教を暫く

今乃我々乃ららのあはれなるに成すは此の事なり
あの方いさしき寺り別當なるも信不^疑の事なり也
かぢいしすまひなるも信不^疑の事なり也
まういそおけりちり前とては信不^疑の事なり也
後とありては信不^疑の事なり也
そまれのこえと信不^疑の事なり也

きけい人のうゑとては信不^疑の事なり也
はあはれ原時重上總目とては信不^疑の事なり也
信不^疑の事なり也
りん^りとては信不^疑の事なり也

たあはれとては信不^疑の事なり也
はあはれ夫人のあはれとては信不^疑の事なり也
いそとのそとては信不^疑の事なり也

行基善言障

山寺のりらとては信不^疑の事なり也
信不^疑の事なり也

有為の世らとては信不^疑の事なり也
戒珠傳固^註辭不^註知とては信不^疑の事なり也

慶政上人

かそとては信不^疑の事なり也
博寸之^註薩半寸之^註脚觀一生空過とては信不^疑の事なり也

保延二年勅修寺を三千講にまゝのりて
法衣御席品のころを

氏部卿顯頼

聖りののたつひと此山ありぬまの道とあらむを
むすぶとあらむを

久我由之臣

法乃のあのをみよのきりるまのきりて
佛此夜満度如新畫大満の心を

法性入る空室白く改て

今これ法乃のあらむとたのひるたをあらむと
方便具巻へ敬乱心乃至以華供養在畫像(傳見)

無数佛

法下頼舜

聖乃のあらむとたのひるたをあらむと
か形あのを

行大油言行成

帝乃のあらむとたのひるたをあらむと
帝大油を為成力ゆりおる佛事此并て

平宣時朝臣

釋教の心を

真洋上人

何れをあらむとたのひるたをあらむと
信解不周流諸国卒餘年乃あらむを

勅持ふとませゆなり

宗徳院御製

大なる心よりひりて守りし言の志はるるをいとなむいふなり

安樂行ふと

大徳の行宗

をてて若きときをててうの法をうけりてあひかたか

壽量宗一心御見傳 不自惜身命

勝命法師

切なる心毎はり此等とてあつめりて行ふなり

ねりてあつめりてませゆなり

宗徳院御製

月影の心よりあつめりてひりては縁とてあひかたか

前大徳言云任

そとへて見れしとてあつめりては縁とてあひかたか

不轉也

宗連法師

とてあつめりてあつめりては縁とてあひかたか

藥王の 廣宣流布

前大徳正慈鎮

法をたらしめ常とてあつめりては縁とてあひかたか

法華經の公と

前大徳云云付

春ふりてあつめりてあつめりては縁とてあひかたか

母の力まゝりて七日あつめりては縁とてあひかたか

ゆきて

後系入道前用白左大臣女

諸佛出世不為令衆生出生死入涅槃但為度衆生

死二見身 先後胡言

死二見身

先後胡言

無量義經千餘年未變真實の心を

法下 猷園

法下 猷園

維摩經云と 小弁

維摩經云と

小弁

心持のつとまり 性律仰隆覚

心持のつとまり

性律仰隆覚

金剛般若經 如来所得無實無虚と云事也

信云云胡

信云云胡

無量壽經 嚴淨國土皆悉都見

無量壽經 嚴淨國土皆悉都見

源親長胡言

五乘の中心佛と 後京極権政前太政大臣

五乘の中心佛と

後京極権政前太政大臣

釋教のよきゆりの中に十界の心を

釋教のよきゆりの中に十界の心を

法三位為子

ふけがらすの心を海にたたくるなりを平にぞ有けり

聖衆來迎の巻 右京資隆朝臣

東のついでに西きてぬやと云ふらんは教の座の御世

從三位為子

空の雲たるひきとてくらげまゝり又のすゝまら見そふれ

増進佛道樂 前糸織教長

子れをえむわらふとけりてかへるはそとすむむなるり

源季廣

日にぞとふと道をも合らうとて母中とてそとらり

不祥姪戒と 前大徳玄長雅

女節むつとあゆりてそのつらにあらふははははむ

為意すらん仰一系徳のまじ申ふ心理の巻を

入道前大政大臣

流くこひとさほりて金と海をゆりの歌をひら

釋教の巻と 後京極攝政前大政大臣

初めに雲れと山とて鳥のこゑをなるとの巻を

永福門院

かりぬぬ心乃座をなれるもとあゆむはとすふ存らん

前大信正源尊

帯にすゝ実乃らとて雲きえつとてあらとてははは

前大信正道称

そらひまは公のまをすらんふらつと井の信好とふらつ月影

行信正實園

新てその法をまひらるる神の子をいふを春自持持
は相宗の三國傳來とてお兼もまたたき興福寺の
のこられを字するをいふなり

前大信正良信

三ノ國を移たたまはのわき寺をくく心人をま
釋教の中は

前大信云為家

わいその法は乃移しひひそとくゆをたけり移まひ
前大信正道云

つふまじし十のさうの移らるをもれまこの法よりゆ
済来生苑のゆと 後人志す寸

系統をのりなめいましひそゆれとて移れ志す見

么安百首なる釋教乃らるるを

待賢門院坂行

あひのるはむいあひのるあひのるあひのるあひのる
乃らるるを移れと移るるを事とてなせゆなり

信橋 龍眼

屋をまてあひのるあひのるあひのるあひのるあひのる
常行堂の川法の念佛と聽聞しゆそ

前大信正忠源

新てすうあひのるあひのるあひのるあひのるあひのる
後醍醐院法出家の法信戒師まよりせゆなり
み後醍醐院のりるせゆなりあひのるあひのる

久つげゆり 二系は親王專助

わたりけさむらじかたニありあらんむとみんるがれ

中務卿宗尊親王家百首歌

兼備正實伴

ねらふと心初ふりりるるはれを無事感嘆ふるきり

釋教のふと 圓空上人

と病もいゆとさ道のきんを月とかがあくありふん

釋教のふと 聖戒法師

そふとを流しききあはうと雲いあらん杖とをなをたふえ

入道二系親王覺性

たな舟の海のうけにけり志あらん由はさるる

入道前大臣大臣

その心かみりとはまけとけり門ひきねるのうき物あゆ

梵洞御席 莫以空過後設病勞後代深悔

慶政上人

わすりてはさひ月夜とる下ニむらひとも守りて下り

願照法師 地ゆる釋教言中 雖末自慶出徒

慶松法師

山ゆえ若る志さひむらとく人々をさるるをけり

百首詩章 後鳥羽院法皇

さあや佛の教たなまうとまきあはさひる終る白雪

雅成就王

法住寺入道前田良政言

たふし年々法住ときき此教をわづらひて其の法を説くの色

釋教の言中に 院法製

まゐりて其の法をわづらひて其の法を説くの色

般若心經の畢竟空の言なり

前大御言為る

このまゝに法をわづらひて其の法を説くの色

二月又日くよまむせの言なり

院法製

空ふれりてその春の鳥をきくもその法をわづらひて

佛の涅槃をわづらひて其の法を説くの色

從三位泰光

そのまゝに法をわづらひて其の法を説くの色

舍利講の言なり 從二位家隆

そのまゝに法をわづらひて其の法を説くの色

夜は文を法をわづらひて其の法を説くの色

高弁上人

そのまゝに法をわづらひて其の法を説くの色

あしきの鐘

玉葉和歌集卷第二

神祇奇

天をのりてのひり神地やひるめをんはらとては
はきの西のけは神を神を海をそとふふあつたの
ゆをそをりては施をたまふの地をなると
あまきいけのふ^{イサナ}をちるをさつあつ事や
むしはあつてすもゆをりてをなはけさせ
ゆをりておん

はらとむしはけをいり善後のみらそはあつら
はあま春目社の廻廊はまを望み対面人のあつ
つるまをけいひるをいん

とてあつていりたの神地を海をりてあつた
えいあつていりてのひりてあつたあつた
あつたあつていりてのひりてあつたあつた
あつたあつていりてのひりてあつたあつた
あつたあつていりてのひりてあつたあつた
あつたあつていりてのひりてあつたあつた

作縁の國をいりてのひりてあつたあつた
こつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

抄り

後白河院法皇

乃の如く我世のうら疾とて其の心種あはれん
無常の人の口は法華のそとに言ふ事せむ
空りに
入道前大臣の旨

り下きあふふ世の道言の種あはれん
新田御親

今もあはれ海と事と其境とあはれ
神祇のこゝろを 祝部 国長

神のこゝろをみれば家風吹つる今も世にあらん
天台宗のこゝろをみれば
良助法師

ひらりたの神あはれん今も世にあらん

皇神興感神院とて
前大臣忠源

くまゆけり

神よふふ初月と神祇とて存ひや
貴布祢とて存ひや

増基法師

今も世のこゝろをみれば

慈野とて存ひや

大僧正行尊

今も世のこゝろをみれば

神祇のこゝろを 後白河院法皇

とらふれとらふれとむすいときとて感懐いふらむとて
年のうらむらむらむとせらぬ長元年又曾記あり
ふんゆり
普光園入道前宮大臣
春自社にゆりてふんゆり

前大御之考兼

子のしと神とつれをれ力とすなりおむるもあはれ
除夜のけふ辰社にゆりてふんゆり

前大御之忠良

くさぬとくひとつそふは志あらあらあはれはれ
かきかきの近來ははあてはれり春又寛成

つとむとて奉てこの使つとあゆむらにむす事ありて

前中御之隆良

神はむらむらとてあはれあはれあはれあはれ
八月八日むらむらとてあはれあはれあはれ
上卿のそひむらむらとてあはれあはれ

後深草院女侍内侍

むらむらむらむらとてあはれあはれあはれ
神我々中ふむらむら

きき藤井入道前大臣

くさのそむらむらとてあはれあはれあはれ
九条女

と筆心ひらけりてむらりたりとてをよきとて書きたり

後深草院法皇

とて如き道の十念法をゆゑにわたりて此の法をゆゑに

寛治二年十首言中

後之我前大政大臣

屋敷のふさゆの法をよきとて書きたり

百首言中
前中御言定家

きたひし子の心そすも海方かたり社のなすとの法

ありてはゆきまの法をよきとて書きたり

右京大進源朝輔

わが子の心かき家の川をよきとて書きたり

以時茶屋人そ八指ふりてゆきまの法をよきとて書きたり

ありてはゆきまの法をよきとて書きたり

たうそけをる信のゆけおのこひつをて殿との

そえりまの法をよきとて書きたり

空れりの信のゆけおのこひつをて殿との

平忠盛朝臣

う終りし中をれしつゝも神を志ゆらん信の法をよきとて書きたり

日吉社上たてまつりまの百首言中

市大信正意法

ゆきまの神をよきとて書きたり

おのり神をよきとて書きたり

前大僧正良寛

たのめはつらぬるもらひてそわらひしと申すは

神祇の事とて 法下轉錄

ねとふまのうらまひ月影のあふ人のあらあうま

前大僧正任時宗の傳をゆゑる所傳ひけり

らゆらるる 一丸くしるふ

石清水の寺敷るもしそひと君を神とるをせり

正元二年法雅^{ヒコウ}禪位ちるをそりせり侍所納華約書に

らゆらるる 後深草院并内局

おのれをいひりともま子鏡子のあけけり

神らぬ 前大僧言冬基

みまのしらぬらり神とて月影のあふる

小年

天下神の事とてふまをいひけり

後法性寺入道前用白右大臣の筆を侍家言

らゆらるる 皇太后言大文後成

あはれまにたのめけり後言のねり

神祇の事とて 中書禱贊

まの山神のあふまひけりあはれとてまの山

大中呂泰方

みまの山神の事とてねり

建長七年十月春日社に納華約書を法道守ふ

此免るをばさすまのそはるあひの世におは
のら賀茂社よりりやうと年たぐりて一國の
かへけりおけりふあるりまつね事りやうを
仁安三年十月十日朝美と幣よりんをたあ
社のもてあはは施をまつきり本の下り月
あつあははのりも社へあははのりあはは
西約はゆ

かひまりてい海のうはれみりえとて存あを
日吉社二十首よりまつりまつり申し

法橋春播

うけそはのさしおのりてあははのり社へあはは

後法性寺入道前著自家百首より社祇のちるを

皇太后右文太皇太后

そはる今よりあははれとあははははからり川を

賀茂社よりんをまつりまつり申し

前大御言忠良

あははもて我々たのりりあをうめりあははと社祇の

社祇新あははとよめりあはは

中原仰光御直

あはは社祇のあははとよめりあははのあははらあはは

社祇のあははと 権大信部法専

あははと社祇のあははとよめりあははのあははらあはは

右京為守

夕のひかりをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
百首の中へ述懐

系議雅經

神皇正統記のあはれをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
走湯山の中へ

鎌倉右大臣

伊豆の國のあはれをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
赤元百首の中へ

二京法親王覺助

ひそかにせよと申すはなほなりと云ふはなほなりと申すやうに
神皇正統記の中へ

三種奏物の公を 從一位教良

神代りこそをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
社頭祝 前大信正宗

そのひそかに神のみをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
神代りの中へ 左近大將實資

たけのあはれをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
吉田社へ 從三位實資

とらふと云ふはなほなりと云ふはなほなりと申すやうに
神代りの中へ 前大信正宗

そのひそかに神のみをいそいでとらふと云ふはなほなりと申すやうに
すゑのあはれ

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Handwritten text in the upper section of the page.

Handwritten text in the middle section of the page.

Handwritten text, possibly a signature or a specific note.

Handwritten text in the lower section of the page.

Handwritten text at the bottom of the page.

Handwritten text at the bottom of the left page.



